

ドラマ手法を用いた小説読解の研究

～「語り」とは、他者の存在を希求するよびかけなのだ～

● 青 木 幸 子

1. はじめに

学校現場における30年にわたる臨床実践を通して、高校生たちの「語りの力」に注目してきた筆者は、生徒達独自の声を交錯させることで新たな意味を創出する「声のプロジェクト」の実践を核にした共創教育創出を模索してきた。

筆者の提起する共創教育とは、従来の学校において制度化された知識注入型の学びとは性格を異にし、基本的には、学びを個人の頭の中の活動としてのみ議論するのではなく、他者との相互交流の中で、共同で意味を構築していく創造的過程を重視する。生徒が共同的な学びに参加し、他者と向き合い、関係構築をする中で、それぞれが自身を発見し、自己変容する過程を探究する。それは、参加者それぞれの異質性を解消することを意味するものではなく、教室における学びの中で、生徒達が個別な差異性を認め合い、独自の異質な声を響かせながら、その異質な声を交錯させる実践の中で、共同性を実現することを目指すものである。

生徒が授業における学びの主体となる共創活動が実現したとき、そこには、生徒の学びのみならず、教師にとっての学びもたち現れる。教室が、教師が一人演じる舞台から、生徒達の学びの場としての舞台にかわるとき、教師は自身の役割が大きく変容することを学ぶ。教師は、学びのプロデューサーとして、生徒達が学びの具体的内容をイメージできるよう提示し、参加を促進する動機づけを工夫するべく、さまざまな学習活動をデザインすることが求められる。同時に教師は、生徒の学びそのものを促進するファシリテーターとして、また学びの主体である生徒の伴走者として、対話活動やリサーチ・ワーク、作品制作における生徒の活動を援助することも必要となる。

このような視点に立つ共創活動が実践されるとき、学校空間は、多様なドラマを創出する舞台となる。生徒達の複数の声が響きあうことで、新たな世界、新たな意味の創出を目指す共創教育は、ミハイル・バフチンのいう「ポリフォニー」としての学びを実現するもの、つまり、「語り」の共同体を創出する試みでもあるといえよう。バフチンは、『ドストエフスキーの詩学』の中で、「ポリフォニー」という世界を次のように述べている。

「それぞれに独立して互いに融け合うことのないあまたの声と意識、それぞれがれっきとした価値をもつ声たちによる真のポリフォニーこそが、ドストエフスキーの小説の本質的な特徴なのである……それぞれの世界を持った複数の対等な意識が、各自の独自性を保ったまま、何らかの事件というまとまりの中に織り込まれてゆくのである。」(『ドストエフスキーの詩学』p15)

バフチンによれば、作者は、単一の統一された「声」を話すのではなく、登場人物の「多くの声」を通して、作者がいかにか話すが重視される。つまり、対話的な意味空間の、多声的な創造が主題となる。教室に多様な声が響きあう「語りの共同体」を目指す実践とは、バフチンの「ポリフォニー」の概念を援用し、聴きあう関係に基づく対話的コミュニケーションを模索したものである。

筆者が拙稿「語り」を軸とした《共創教育》創出に関する研究で扱ったラジオドラマの背後に

は、その言葉にたどりつくまでの膨大な語りがあった。自身の記憶や思いを十全に語りうる言葉は、ア prioriには存在しないが故に、出来事について語り始めるまで、生徒達は、幾度となく言いよどみ、言いなおし、沈黙し、そして再び語り、そして他者との対話のなかで、再び言葉を模索し、新たな語りをはじめ。沈黙も語り直しも、言いよどみも、それはすべて語り手の思いと深い考察の表れであり、それゆえに、沈黙に耳を傾ける聴き手の存在が重要となっていた。聴き手は語り手の思いに共感しつつ解釈し、それを再びフィードバックする、つまり、聴き手はリアルに感じた思いを解釈するために、応答するのである。送り手の意図と受け手の解釈をすり合わせる応答の中で、意味が創りだされていく。共創活動におけるラジオドラマ制作とは、出来事を語る仲間の声に応え、響きあう生徒達の声の応答過程なのであった。

表現教育の実践経験から筆者は、「語り」の生まれる教室、すなわち「聴いて、応じて、深めよう」という深い対話を通じた読解実践を探求してきた。それぞれの個性を持った生徒が、物語の中に入り込み、自身の想像力を働かせて、対話による学びを繰り広げる。その対話による読解の新たな試みとして、本研究では、ホット・シーティングというドラマ手法を用いた高校二年現代文「山月記」の授業の実践を紹介していきたい。

2. 研究実践

2-1 ホット・シーティング実践の契機

本実践の契機となったのは、「山月記」を筆者が朗読した後の、一人の生徒の語りであった。「山月記を読みながら、私はすごく、考え込んでしまいました。頭の中で、想像すること、イメージすることの限界。私たちは虎にはなれない。でも、李徴が何を語りたかったのか。李徴にしかわからない想いを、私はからだで感じてみたい」（2010年6月9日）

「からだで感じる」という言葉は小説読解の授業で、登場人物への共感を深めるとき、筆者が頻繁に使用する言葉である。一学期に実施した、よしもとばなな作「バブーシュカ」の読解において、原文にない語り手の思いを敢えて言語化する試みとして、役になりきるロール・プレーを経験した後、生徒が次のように語り始めた。「今まで、頭の中で想像力を膨らませることで、登場人物の思いを考えたり感じる事ができると思っていたけど、役になりきることで、リアルに、主人公の気持ちをからだで感じる事ができた、そんな気がします」それ以降、生徒達は、他者の気持ちを深いところで共感することができたときに「からだで感じる」という言葉を使うことが多くなった。「山月記」の感想を述べたMもその一人である。さらにMの語りは続いた。「この山月記をこれからみんなと一緒に読んでいくとき、私は、李徴の心の中に入りこんで、李徴の視点で世界を見る体験をしてみたいです」このMの語りをきっかけに、李徴との深い対話を希求する発言が多く生徒から続いた。「最初は漢語があまりに難しく、漢文よりムズい、日本語じゃないって思ってたけど、先生の朗読聞いてたら、なんだか、李徴が、ほんとうに、私に語りかけているみたいで、ぐっときて、ウルウルでした。私も、李徴にききたいことがたくさんあります。」

初発の感想を聞きながら、筆者は山月記の授業デザインとして、生徒達からでた「問い」をベースに、「山月記」の読解を深めると同時に、一連の授業の最後に、「からだで感じる」体験としてホット・シーティングを試みるという活動のプロデュースも模索し始めた。

2-2 ホット・シーティングの実践

ホット・シーティングとは、学習者の一人が登場人物になりきり、中央に設置した椅子（ホッ

トシート)に座り、他者からの質問などに答えるドラマ技法である。このホット・シーティングの手法を筆者が大学での教育方法研究(工藤直子の「のはらうた」南木佳士「うさぎ」宮沢賢治「よだかの星」等)において実践し、分析・検証を重ねた結果、「共感力」「思考力」「想像力」「創造力」の育成に有効であるということが明らかになった。同時にホット・シーティングを実施する場面(最初・読解の過程・最後)は教材により大きく異なるため、個々の実施シーンを検討することも重要であることを検証してきた。筆者が授業デザインにおいて、ホット・シーティングの実施を「山月記」読解を深めた最後の授業においたのは、初発の生徒の感想の中で「言葉が難しく」「漢語が多くて」「日本語じゃない」等のコメントが多く発せられたことによる。「からだで感じる体験」という生徒達の希求に応えるためには、「山月記」のテキスト世界を、いかに生徒自身の世界に引き寄せることができるか、そこが鍵となると考えたからである。この活動が十全に行なわれたとき、はじめてホット・シーティングの有効性が発揮できる。そこで、「山月記」読解授業の中において、生徒の生活世界とテキスト世界をつなぐための多くの素材を用意し、対話で深める読解実践活動を行なっていった。その中で生徒達の対話がとりわけ深まったのが、以下の4点である。①科挙制度について、現在の受験制度との比較を通して考察を深める②精神的疾患はいかなる要因によって発症するのかについて、アイデンティティ構築とリンクさせて考察する③「智恵子抄」と重ねながら「壊れていく私」の苦悩を考察する④キューブラー・ロス「死ぬ瞬間」における「死にゆく過程」5段階と李徴の自身を受け入れる過程とを比較考察する。これらの活動を通して、「山月記」の世界を新たな視点から見つめることをはじめた生徒達が、最終日である6月30日、咆哮する最後の1行を行なった後、「先生、これで、山月記終わるの、さびしいです、もっとやりたいです」と言い始めた。そこで、筆者が「最初の感想のとき、李徴にいろいろ聞いてみたいといった人がたくさんいましたよね。それでは、どなたかが李徴になって、この椅子に座っていただき、その李徴に、みなさんが、それぞれたずねるっていうのを最後にやってみましょうか?」と投げかけたところ、生徒達から「わー、おもしろそう、やりたい」と盛り上がり、ホット・シーティングがはじまったのである。

このホット・シーティングという手法は、「いま、ここで」李徴になった人物に仲間たちが「質問し」李徴役の生徒が「答える」という一回限りのプロジェクトである。生徒達がいかなる問いを発し、そして、それにいかに応えるのか、全く想定不可能の試みである。しかし、生徒達は、対話による読解活動を通し「山月記」の登場人物に共感し、それを個人個人の体験に終わらせるのではなく、クラスの仲間達とシェアしたい、そんな思いを強く抱いていたのである。

「からだで感じてみたい」と最初に感想を述べたMが李徴役に立候補し、椅子に座る。ホット・シーティングという未知のドラマに向け、期待と緊張でシーンとなっている教室、「それでは、ここに座っている李徴への質問をはじめたいと思います。どなたか、聞きたいことがあるかた…」「はい、おたずねします」仲間たちが次々に問いを発し、M李徴が応える。その教室空間において繰り返されたドラマの一部をここに紹介したい。

(Q:質問役の生徒・全て異なる生徒達である M:李徴役のM)

Q:袁儻(えんさん)に会った時、あなたは、どんなことを思いましたか?

M:驚きました、まさか、出会うとは思ってもみなかったからです。こんな姿になっていますが、自分が人間でなくなってしまうまえに、最後に袁儻にあえて、嬉しかったです。



Q：どうして嬉しかったのですか？

M：袁儂は、私の唯一の友達だったからです。自分のいろいろな面、気取っていたり、いやみな奴だったり、そんな私を、袁儂は、まるっと、受け止めてくれてたからです。

Q：虎になる前、ものすごく、ヤバイ状態のときに、なぜ、袁儂に会いにいった、相談したりしなかったんですか？

M：それは、自分にとって、一番大切な友だからこそ、自分のみっともない姿や状態をみせられないという思いがあったからだと思います。へんなプライドです。でも、大事な人だからこそ、しかも、尊敬している友人だからこそ、自分の弱い、哀しいところはみせられないって思ったんです。

Q：そのプライドがあなたにとって、一番やっかいなものだったとは、思いませんか？

M：思います、でも、人はプライドをなくしたら、生きていけません。私が私であるために、一番大切なよりどころは、やっぱり、プライドだったから……

Q：あなたの奥さんは、あなたのその自尊心については、どのように感じていたと思いますか

M：受け入れてくれていたと思います。妻は確かに私の気持ちをわかってくれましたが、わかってというか、私がやりたいことを受け入れて、仕事をやめることも、詩業に専念することも、認めてくれました。

Q：はい、それなら、あなたにとって最大の理解者が、すぐそばにいたということになりますが、奥さんがあなたを認めてくれるだけでは、だめなのですか？

M：そうです、だめです。私にとって、私が認められるということは、自分の詩を人々が認めたたえるという高い評価を受けることだからです。

Q：なぜ、そこまで、あなたは、人の評価を気にしていたんですか？

M：それは、さっきも言いましたが、評価されてこそ、私が私として生きる意味があるからです。そう、でも、他人ととっても、誰に評価されるかが、重要だったんです。ある意味、妻は、私を評価してくれたと思います、なんせ、科挙の試験に一発で通った私ですから、私の才能

を信じていてくれたと思います。でも、私は詩がわかるひとびと、インテリたちに認めてもらいたかったのです。

Q：だんだん虎になっていくその過程でおもったことを教えてください

M：人間としての思考ができなくなること、正確に言えば、自分が自分であるという認識をもたない時間がたくさんあるということは、私にとって、どうしても、受け入れがたいことなのです。でも、次第に、あきらめのなかで、人間であったことが、夢の中のできごとのような気もしてきましたが……

Q：もし、もう一度だけ人間にもどれるとしたら、何がしたいですか

M：詩を書きたいです、そして発表したいです

Q：さいごに、あなたが、私たちに姿を見せて二声三声咆哮しましたが、その声を人間の言葉で聞かせてください。

M：……さよなら……さよなら……

M 李徴の「……さよなら、さよなら……」をきいたとき、教室中には、しばらく静寂が訪れ、そしてあちこちからすすりなきが漏れた。李徴役をやった M、たくさんの問いを發した仲間たち、みなが同様に涙をこぼしている。「からだで感じる」ことを皆が共有できた瞬間であった。

優れた対話が繰り返し広げられる場に参加したとき、生徒達は一人ひとり自身の想像力を膨らませて、そこでの対話に参加することができる。ホット・シーティングにおいては、対話者だけが対話をしているのではなく、その対話者を含めて、その場を共有する生徒の数だけ対話が生まれている。教室空間の中で、対話者の語りに一生懸命耳をかたむけることで、生徒達一人ひとりが、自身の創造したイメージの世界で、静かな自己内対話を繰り返し広げていた。生徒達は、いつしか、M 李徴の語りにひきこまれながら、李徴がまさにそこで生きているかのように感じていたのであった。息をひそめ、黎明の中で、李徴の語りに耳を傾け、泣き、怒り、そして、深く哀しむ姿がまさにそこにはあった。

2-3 ホットシーティングによる読解の効果の検証～テキストを読解するとは？～

筆者は、テキストを読解するということを、一人ひとりがテキストと対峙し、思考力・共感力・想像力を発揮させ、自身の解釈を紡ぎ出す活動であると考えてきた。そして、それを可能にするため、他者との対話的学びの中で、イメージを拡大・深化させることが、新たな意味生成のために重要であると認識してきた。その考えは、誤っているとは思わない。しかしそれらに加えて、今回のホット・シーティングの実践によって明らかになったことは、知的理解をこえて、からだで感じ、心の深いところで考えるということの重要性である。ドラマ的手法を用いることで、生徒達は日常と非日常とをいとも簡単に飛び越え、心の深い部分で「わかる」ということを感じた、と口にする。その「わかる」という感じを味わった生徒の一人がホット・シーティングの実践後、次のように語りはじめた。「なんだか、李徴に足りなかった微妙な点が、私、今わかった気がします。今までの李徴の詩には、相手が、宛先がなかった、誰にむかって語っているのかわからない詩だったんだと思います、だから、人の心をゆすぶらなかった。今までの李徴は賢いから、ホーって人が感心できるような技巧的な詩は書けたけど、誰に届けるのか、宛先のない詩だったから、誰の心も感動させることができなかつたんだって、そこが微妙に足りなかつたんだって。山月記

の中の最後の李徴は、私たちにむかって、ちゃんと語りかけてる、だから、今の李徴なら、きっと多くの人を感動させる詩を書くことが可能なのに……悔しいです」その語りに触発された別の生徒が言う。「私も、今、なんか、李徴がわかった気がした、あのね、これは、李徴が自分を受け入れていく物語なんだって、今わかったの。今日ね、キュープラー・ロス先生の死を受容する最後の段階受容の意味がホントにわかった、李徴は、虎になって生きていく自分を、語ることで、受け入れていったんだって……でも、それが人間として行なう最後の事っていうのが、哀しい」「でも、自分を受け入れることができないまま生きていくよりも、人間である自分と、きちんと、さよならができただけ、少しだけ、幸せかもしれないよね」ホット・シーティングの試みは、10回にわたって実践してきた読解活動を生徒達が自分自身の中で咀嚼し、自身の経験とリンクさせながらさらなる新たな読みに発展させる端緒ともなったことが、生徒達の語りからも明らかになった。さらに、仲間と一緒にテキストにむかい、クラス全員で思考することで「チーム脳」が出現し、創造的思考が可能になっていったことも、生徒達の感想文から検証できた。ホット・シーティングに座る M 李徴に対し、仲間が問いを発することで、生徒達はそれぞれの視点で応える過程で自身の思考の枠を広げていったこと、つまりフレームの変容がそこで起こったこと、さらには、自身の答えと異なる M の発想に対して、新たな視点をもらったと感激するコメントも多くみられた。以下、ホット・シーティングを体験した生徒の感想を一部紹介したい。

- ・自分では思いつかないようなことを問われて、私の脳にいきなりスイッチがはいったような感じがしました。李徴になって考えていると、何度も涙がでそうになり、声がつまりました。
- ・途中から、ホット・シーティングに座っている M ちゃんが、ほんとうに李徴に見えました。教科書の中の李徴は話しかけても、答えてくれないけど、目の前の李徴は私に語りかけてくれる、ぐっときました。
- ・誰かが李徴に質問するたび、もっともっと聞いてみたい気持ちがわいてきました。李徴が答えるのを聞きながら、ああ、李徴はこんなふう生きてきたんだなど、わかってきて、泣きそうでした。
- ・前の人の質問と答えを、みんなが一生懸命聞いていて、それにつながる問いがどんどん生まれるのが、すごいなあと思いました。問いが刺激的だと、答えも深いものになるのがすごいと思いました。
- ・授業だと先生の問いにあたった人だけが、真剣に答えていて、あたっていないときは、ちょっと、ひとごとみたいなことがあります。でも、今日はみんなと一緒に山月記の世界に入っていた気がして嬉しかったし、なんだか、ものすごい、達成感がありました。

ホット・シーティングの実践記録、生徒のコメント及び感想文等をもとにホット・シーティングの検証・分析を行なった結果、①質問力②傾聴力③共感力④思考力という4つの能力の向上が明らかになった。

- ①質問力：いかなる問いを発するかが、いかに他者の思考のスイッチを入れ、それが連鎖してみんなの思考がスパークしていくか、思考が共鳴していくかが生徒達の感想からも明らかになった。そして、共鳴した質問によって、仲間と一緒に考えていくというチームで思考する状態を創造していったのである。問いによって生まれる「共創教育」の創出をここに見ることができたといえよう。
- ②傾聴力：問うということと、聴くということは表裏一体の活動である。生徒一人ひとりが仲間

の発する問いに真剣に耳を傾け、その問いを一つの刺激にして、自身も新たな問いを立てるといふ活動を行っていたことから、ただ相手の話を聞いているのとは全く異なる状態であったことがわかる。つまり、他者の話を傾聴することで、次に自分も問いをたてるということが、この実践では自然に行なわれていたのである。

- ③共感力：問いに対し、ホット・シーティングに座る M 李徴が答える、それを真剣に聞き、自らの答えと照らし合わせながらリフレクションを行なう、その過程を、多くの生徒がこのように描写する。「まず、M ちゃん李徴の話をすごく真剣聴きました。自分だったら、どう答えるかなって考えてはいたけど、それは、まず、そばにおいて、まずは、きちんと M 李徴の話を聴いていました。いつもの私だったら、人の話の途中でも、そうかも、でも、だけど、とかいって、途中から自分の意見の正しさをいかに言うかということを考え始めていたけど、今回はちょっと違いました。まずは、M 李徴の立場に立って聴いていました」
- ④思考力：発せられる仲間の問いに対しても、応じる M 李徴の答えに対しても、生徒達が多様な視点から深く考えていたことが、ホット・シーティングの後の「新たにわかった点」の語りから明らかになっている。自身の思考のフレームを大きく変容するような問い・答えに接することで、新たな気づきを手にいれたと語る生徒が多い。深く読解していたつもりでいても、新たな視点を見つけることで、テキストの読み自体が大きく変わったと述べる生徒も、以下のような言葉を残している。「自分といていた李徴の言葉が、急に、おれに代わったとき、私は人間だった李徴の中で虎の部分が大きくなったんだと考えていました。あのとき、みんなと対話したときは、その意見が多かったから、私はその考えでストップしていました。でも、今日の問いの中で、最後に、再び自分って言い始めたのはなぜですか？というのを聞いて、びっくりしました。あー、途中でまた、自分って言い始めたところがあったんだって。きちんと読んでも、実は、自分勝手に読み始めていたんだって気づきました。びっくりでした」ホット・シーティングの実践によって「思考力」を深めた生徒達は「新たな視点」を手に入れることで、「山月記」というテキストを新しい視点でもう一度振り返ることができるようになったと述べている。「問い」と「答え」によって行なわれるホット・シーティングの実践により、思考のフレームワークが拡がり、今まで全く考えていなかった視点からも思考することが可能になったこと、さらには、それをクラス全体で共有することができるようになった思考の連鎖とも呼ぶべき創造活動が明らかになったのである。

3. さいごに

ドラマ的手法を使った教室空間の中で、李徴 M の語りにひきこまれ、日常と非日常の世界をいとも簡単に飛び越えた生徒たちは、読解を深めるといふ作業が、知的な理解をこえ、からだで感じ、心の深いところで考えることなのだということを理解した。現実から虚構へ、そして再び新たな現実へと架橋し循環していく往還運動こそが、新たな読解をひらくものであるということ、また、その読解を深める鍵をにぎっているのは、いかなる問いを発するかにあるということ、生徒たちだけでなく、筆者も学んだのである。

教室という空間では、対話者だけが対話をしているのではない。その場を共有する人の数だけ、対話の世界が生まれている。対話者たちの語りに一生懸命耳を傾けることで、生徒一人ひとりが想像力を発揮し、自身の創造したイメージの世界で、静かな自己内対話を繰り返しているのだ。